北海学園大学

日本語教員養成課程

『報告書』第９号

北海学園大学
2024 年 3 月

目　　次

日本語教育特別演習（国内実習）…… 2

実習を終えて　人文学部日本文化学科４年　藤野戸柾希 …… 3

日本語教育特別演習を振り返って　人文学部英米文化学科４年　原　　弥郁 …… 5

教壇実習を終えて　人文学部英米文化学科４年　森長　梨花 …… 7

レスブリッジ大学（カナダ）交換留学生　日本語研修 …… 9

交換留学生との日本語レッスン　人文学部日本文化学科３年　大沼　乃愛 …… 10

レスブリッジ大学交換留学生日本語研修を終えて
人文学部日本文化学科３年　木村　日和 …… 11

交換留学生への日本語レッスンボランティアを終えて
人文学部英米文化学科２年　福士こはる …… 12

レスブリッジ大学交換留学生への日本語レッスン
人文学部英米文化学科２年　山形　蒼太 …… 13

日本語教育特別演習（国内実習）

日時：2023 年 12 月 5 日（火）
場所：札幌ランゲージセンター

これまで、近隣のボランティア団体や海外の協定校で実習をおこなってきたが、今年度、初めて国内の日本語教育機関に実習生を受け入れていただいた。

実際にカリキュラムの一部となる授業を担当させていただき、実習生にとって学びの多い時間となった。

実習生のレポートを次ページ以降に掲載する。

担当授業の内容と担当者は以下のとおり。

S2 クラス（初級）

● 9：00〜9：45　　①『文化　初級』15 課　文型 6
担当：森長　梨花

● 9：55〜10：45　　②『文化　初級』15 課　文型 7・8、練習 c
担当：原　　弥郁

S3A クラス（初級後半）

● 13：10〜13：55　　③『文化　初級』32 課　文型 2、練習 b
担当：藤野戸柾希

実習を終えて

人文学部日本文化学科４年　**藤野戸柾希**

2023 年 12 月、日本語教育特別演習により、札幌ランゲージセンターで教壇実習を実施させていただいた。非日本語母語話者に対して、実際の授業を行うのは今回が初めてであった。それまでは、日本語教授法で学生に対し 15 分程度の模擬授業を行った経験しかなかったが、札幌ランゲージセンターで、以前インターンシップに参加させていただいたとき、実際の授業風景を見学したため、自分がどのように授業を行うかをイメージすることはできた。

今回私が担当した授業は初級クラスで、比喩の表現「～ようだ / みたいだ」を取り扱った。日本人にとっては、比喩表現は無意識的に使われるが、その意味、使い方を初級レベルの日本語学習者に説明するのは容易ではなかった。教案作成にあたって、一番苦労したのは導入部分であった。導入部分は、アイスブレーキングで扱った内容に関連させて作るのが基本である。アイスブレーキングでは、小道具を用いて行ったため、扱う例もシンプルで作りやすかったが、導入部分では、それを発展させて生徒にわかりやすい例を考えるのが大変だった。指導用例集を参考にしながら、生徒がすでに習っている語の中から、生徒がわかりやすく、尚且つ自分が例文を作りやすい語を探すのはとても困難であった。しかし、このように生徒がわかりやすいことを念頭に置きつつ、自分が説明しやすい語を考えることが重要だと感じることができた。また、言葉遣いに関しても考えることが多かった。一文一文を短くして、わかりやすくシンプルにするのが基本である。しかし、自分自身で気付くことが難しく、教えてもらうことで初めて気付けるものであった。気付かないうちに受身文を使っていたり、丁寧に言いすぎて逆にわかりづらくなっていたり、話す内容の順番が効果的でなかったりなど、教師として話すときに気を付けなければいけないことが多く、勉強になった。

模擬授業では、声の大きさやスピード、板書の仕方や小道具の使い方などを中心に意識して取り組んだ。日本語教授法では、3 人 1 グループで 15 分程度の模擬授業であり、パワーポイントを使って行った。学生役はコロナの影響もあり、同じ講義を受けている学生であった。今回の教壇実習は、1 人で 45 分の授業を、日本語を学んでいる 20 人程度の生徒に対して行った。実際に教壇実習を行う教室の広さや黒板の大きさなど、不明な点も多く、どのくらいの声の大きさが適切か、板書の文字サイズ、見やすい配置などを丸島先生からのアドバイスを参考に取り組んだ。生徒に答えてもらう場面や学生に考えてもらう場面は、生徒の反応によって、時間配分、話す内容など変える必要があるが、模擬授業ではそれらを完璧に補うことは難しく、教案作成の時点で用意しておく必要があるが、できるだけ柔軟に対応するように心がけて練習した。

教壇実習では、最後の授業を担当したため、他の人の授業風景を見ることができ、あまり緊張せずに行うことができた。声の大きさや板書の文字の大きさ、授業中の生徒とのコミュニケーション

なども参考にしながら授業を行うことができた。概ね教案通りに進めることができ、アドリブが必要な場面にも対応することができたと思う。反省点としては、細かいものがいくつもあった。話すスピードは初めに意識していても、授業が進む中で薄れ、早口になっていたり、聞き取りにくい発音になっていた。言葉遣いに関しても、アドリブや意識していないと補助動詞を使いすぎてしまうことがあった。また、後ろの生徒の反応に気づくことができず、そのまま授業を進行してしまうなど、教室全体を見渡しながら授業を行うことができなかった。加えて、進出語彙に関しても準備不足があり、生徒の学習がスムーズにいかないこともあった。反省点はいくつもあったが、初めて日本語学習者に対して授業を行うことができ、とても貴重で有意義な体験をすることができた。

これから、日本語教師として、日本語を教える機会があるかもしれないが、私はまだまだ経験が足りず、外国人や日本語学習者と接する機会も少ないと感じた。今回は初級クラスの授業であったが、中級、上級それぞれに適切な言葉遣いや指導法があり、それを知るには授業の経験を重ねることが第一だが、様々な日本語学習者との交流も重要であると感じた。今回の教壇実習を通して、日本語教育の現場を肌で感じることができたのが最も私にとって大きかった。また、教案作成や模擬授業などの準備の重要性、生徒に対して適切な言葉遣いや話し方など、多くのものを得ることができた。加えて、普段私たちが使っている言葉、表現について、改める機会となった。教壇実習で得たものも生まれた反省点も全て、これからに活かしていきたい。

日本語教育特別演習を振り返って

人文学部英米文化学科４年　**原　　弥郁**

はじめに

私は12月５日に札幌ランゲージセンターで教育実習を行いました。日本語教室たんぽぽで日本語を学習している方のサポートを行うボランティア活動に参加したことはありましたが、自分が教壇に立って授業をするのは初めての経験でした。このレポートでは教育実習を振り返り、そこから得た経験や考え方を述べていきます。

準備段階

私は『文化初級日本語Ⅰ』の教科書177頁の文型７「この部屋は三鷹の部屋より駅から近いです。」と文型８「この部屋はみっつの部屋の中で一番新しいです。」、練習Ｃ「あなたの国について話してみましょう。」を担当しました。まずは教科書を見て教案を作成しましたが、初級前半のクラス向けにしては、構文がやや複雑であることや、未学習の文型を使用している点など、先生から指摘を頂きました。例えば、「教科書を読んでくれてありがとうございます。」は、『文化初級日本語Ⅱ』で習う文法なのでこの言葉を使うと学習者が混乱してしまいます。「未学習の文型は使わない」ということが、授業の際の原則となるため、教師は学習者が既に習った文型の中で授業を行う必要性があると学びました。また、教案では言葉を使って状況を説明していましたが、札幌ランゲージセンターのインターンシップで授業見学をした際に、先生方は身振り手振りを使って説明されていたので、動作や状況を活用した方が分かりやすいと学びました。先生やインターンシップのアドバイスを基に、一から教案を作り直しました。その後は語彙練習で使う絵カードを用意して、模擬授業を繰り返しました。１回目の模擬授業では、教案を確認してばかりであったので授業スピードが遅く、声も小さいため学習者の服に吸収されて聞こえなくなると指摘されました。教案を頭の中に入れて、黒板で文字を書く練習をして２回目の模擬授業を行いました。そこでは先生から前回よりも授業スピードもよくなり、自信が出てきて声も出てきていると言っていただきました。教案作成から絵カード、練習問題の作成など一つの授業を作るのに１か月ほどかかり、教師は授業準備にも時間が掛かっていることを改めて実感しました。

実習当日

導入のアイスブレイクではクラスの人数を聞き、「このクラスは男性が女性よりも多いです。」の「～は～より～です。」を復習しました。私が質問すると、学習者は大きな声で元気いっぱいに回答

してくれて、授業は学習者と共に作られていくのだと実感しました。文型７の「～は～より」を学習するために、学習者のふるさとを聞き、札幌とふるさとを比較して練習を行いました。また、文型８の「～は～の中でいちばん～」では、～は～の中でいちばん～です。と板書して口頭練習を行いました。学習者に文を作ってもらう高度なことを要求しましたが、授業を理解し、習った文型で話してくれました。語彙の練習で都市と首都を練習しました。都市では札幌の絵カードを見せて、首都では東京の絵カードを用いて練習しました。しかし、私は東京は日本の首都で、学習者のふるさとの首都を聞こうとしましたが、間違えて「東京は日本の都市です。〇〇さんの都市はどこですか？」と聞いてしまいました。学習者は困った表情をして、学習者同士で話し合っていました。私は首都の意味がわからず、友だちに聞いているのだと思っていました。学習者が私の間違いに気づき「私の首都は〇〇です。」と言いかえてくれました。そこで私は自分のミスに気づき、口頭で訂正しました。しかし、もう一度都市と首都の意味を確認して、混乱を防ぐためにもリピートした方が良かったと反省しました。また、学習者の表情や反応を見ていれば、自分が言ったことが伝わっているかどうかは、容易に判断できたと思います。私は時間内に授業を行うことに必死になってしまい、学習者の混乱した表情に気づけませんでした。練習Ｃの「あなたの国について話してみましょう。」では時間が５分ほどしか取れず、書いてもらったプリントを確認すると、途中までしか書けていませんでした。以上のことから私のミスによって学習者に混乱を与えてしまったことと、時間配分が上手く出来ずに途中で終わってしまったことが今回の反省点だったと考えます。しかし、模擬練習をしっかりとしていたので自信をもって授業ができていたと考えます。また、休み時間に生徒と交流して、緊張をほぐしてから授業に臨み、声大きくしっかりと聞きやすい話し方で授業ができたとも考えます。

まとめ

今回の教育実習を通して一つの授業を作る難しさと、日本語を教える難しさを知りました。しかし、質問したことに一生懸命考えて回答してくれたことや、教えたことを理解してくれた学習者を見ると、とても嬉しい気持ちになりました。今回の教育実習では日本語教師として必要な資質と能力を深く学ぶことができたと考えます。また、授業終わりに私たちは学習者のスピーチテストの見学をしました。そこでは、学習者は日本語を学び、この学校を卒業してからやりたいことを発表していました。この発表を聞いて私は、日本語教師は学習者の夢を支え、手助けできる職業だと実感しました。私は卒業後日本語教師として働きたいと考え、北海学園大学に入学して日本語教員養成課程を履修し、今回の日本語教育特別演習を履修しました。卒業後は今回の教育実習の経験を活かして、学習者に寄り添う授業づくりを行い、世界中の方々に日本と日本の文化を伝えていきたいです。

教壇実習を終えて

人文学部英米文化学科４年　**森長　梨花**

このレポートでは2023年12月5日（火）に札幌ランゲージスクールで行われた日本語教師になるための教壇実習のレポートである。教壇実習で教案の作成過程や作成した教案の練習、最後に本番をして感じたことの感想などを記載していこうと思う。

まず、教壇実習について詳しく明記していこうと思う。教壇実習とは、自分の作成した教案を実際の日本語学校で学生の前で発表をすることである。2023年12月5日の１ヶ月前からこの発表のために日本語学校で発表をするために教案をたくさん作ってきた。

教案の作成について、教案の作成では自分がこれまでに大学で学んだ教授法の教え方を思い出して、自分ではこの部分で学習者と雑談をしたり、ミニゲームをしたりして学習者が勉強をする場でありながら同時に楽しく日本語を勉強することができるように自信をつけさしたいと考え、教案作成の時に色々イメージをして作ることができた。

その教案を丸島先生に見せて本当にその教え方が正しいのか、限られた時間で学習者に本当にその単元を勉強させることができたのかしっかり先生とも話をして教案を何度も何度も修正をしていただいた。

その修正をした教案を教壇実習の前に何度か本当にその時間通りに動くことができたのか、黒板の使い方は正しいのか確認をする作業に移った。何度か練習をしているときに自分では自信があったところが練習をするときは教案で考えていたところが抜けていたり、本当にしっかりと教えることができたりしたのか不安になって途中で辞めたくなることが多々あった。

本番である2023年12月5日になった。自身が練習してきた成果を発揮する日だ。筆者が学習者に発表する時間が、なんと１時間目である。緊張もしていられる時間すらなく発表の時間になった。発表では、練習してきた成果を発揮して学習者に楽しむ授業を作ろうと頑張った結果、本当は時間ぴったりに終われるはずの授業が何度か抜けて５分ほど早く終わってしまった。終わった後ではもう少し、練習をしておけばよかったと考えていたが、丸島先生や校長先生からお褒めの言葉をいただき、何度か投げ出したくなったが、学習者にちゃんと教えられるように頑張ってよかったなと感じた。やはり今回の教団実習せ学んだことは既存の先生方が教えていることは３者目線で見ると簡単そうだな。自分もできるのではないかと考えていることが、実際に自分が教える立場になると本当に難しくて、授業の前に教案を作ったり、勉強させた内容が本当に学習者が学ぶことができたのか確認がその準備段階ではわからないため、学習者にわかる単語や文法を使って学習させることが必要だということがわかった。

自身は４月から日本語教師になるので、実際に教案で勉強させた内容を教える日が来るかもしれ

ない。その日のためにもっと自分で教案を作り直したり、練習をしたりすることで、自分の持っている生徒に先生の教え方のおかげで日本語が上手になることができました。と話してくれる日を楽しみに教案や、練習、そして実践で頑張っていこうと感じた。

レスブリッジ大学（カナダ）交換留学生　日本語研修

本学では協定校であるレスブリッジ大学（カナダ）から、隔年で短期の交換学生の受け入れを行っている。2023 年度の研修では 80 分間の日本語研修が 9 回行われた。このうち第 5 回から 8 回の 4 回、日本語教員養成課程の受講生に会話練習補助として参加してもらった。

練習補助を担当した学生の感想を次ページ以降に掲載する。

なお、研修の内容は以下のとおり。

●レスブリッジ大研修生：9 名
●本学参加学生：計 17 名
●使用教材：渡部由紀子・緒方由希子・角谷佳奈・左弥寿子（2023）『NIHONGO FUN & EASY 2nd Edition』アスク出版。

第 5 回（6/13（火）9：00〜10：20）

◆本学参加学生：7 名
◆学習内容：「〜、いくらですか。」「〜、ありますか。」

第 6 回（6/14（水）9：00〜10：20）

◆本学参加学生：8 名
◆学習内容：数字、「〜円です。」「〜、ひとつください。」

第 7 回（6/15（木）9：00〜10：20）

◆本学参加学生：7 名
◆学習内容：助数詞、「〜、お願いします。」

第 8 回（6/20（火）9：00〜10：20）

◆本学参加学生：7 名
◆学習内容：「〜、何ですか。」「〜、いらないです。」

〈レスブリッジ大学（カナダ）交換留学生　日本語研修〉

交換留学生との日本語レッスン

人文学部日本文化学科３年　**大沼　乃愛**

私は、2023 年 6 月 15 日のレスブリッジ大学交換留学生日本語レッスンに参加し、日本語母語話者ではない学習者に日本語を教えるという貴重な経験をすることができました。英語に自信がない状態で自ら参加を決めたため、留学生と上手く関わることができるのか不安もありましたが、いざ始まってみると無事に会話が進んでいきました。

中でも、交流した留学生からとある質問をされたことが強く印象に残っています。その内容は、お茶のペットボトルのラベルに書かれていた「green tea」と「MATCHA」の違いについてでした。そこで「green tea は緑茶で、水が多く入っているもの。MATCHA は、深い緑色をしていて green tea よりもさらに濃い味のお茶。多分」と、英語で伝えました。この時、自分の情報が不正確であったため言葉の意味や緑茶と抹茶の写真を検索し、スマートフォンの画面を留学生と共有しながら改めて説明しました。

今回の交流から、新たな視点で日本語を見ることができました。それと同時に、学習者に質問に答えられないことが頻発したり、自信をもって正確な情報を伝えられなかったりした場合、学習者からの信頼も失われる可能性があるため、日本語を教える立場となるには幅広い知識が必要なのだと身をもって感じました。また、学習者との関わりを通して、母語話者の自分が普段何気なく使っている言葉は学習者にどう映っているのかを考え、その言語の面白さを新たに発見することができる点は、言語教育の大きな魅力であると思いました。

そして、今回の経験によって自覚した反省すべき点を忘れずに、今後は多角的な視点を意識しながら言語や日本語教育について学習していきたいと思います。

レスブリッジ大学交換留学生 日本語研修を終えて

人文学部日本文化学科３年　**木村　日和**

私は、2023 年 6 月 13 日に行われた「レスブリッジ大学交換留学生日本語研修（レスブリッジ大学交換学生の日本語レッスン）」に参加しました。私が本研修に参加した理由は、二学期に開講予定だった「日本語教育特別演習」を受講したいと考えていたからです。韓国大田大学校をはじめとする海外の大学での実習の前に本研修で経験を積んだり、実践でしか得られない知識や技術を得たいと考えていました。結果としては、受講を希望していた「日本語教育特別演習」には人数不足のために参加することができませんでしたが、本研修に参加したことで多くのことを学ぶことができたと考えており、私は本研修に参加することができて非常に良かったと思っています。

今回の日本語研修は、交換留学生のほとんどが日本語未習の状態であったため、ゲーム等のアクティビティも交えながら楽しい雰囲気のなか行われました。日本語未習の学習者に日本語を教えたり、日本語でコミュニケーションを取ることは初めてで、研修中は難しさやもどかしさを感じることがありました。私は、研修前に「今日の朝ご飯、何食べましたか。」や「何時に起きましたか。」など、私なりに相手が答えやすいだろうと思った質問をいくつか準備していました。しかし、それらの質問に多くの学生は困った顔で「分からない」と答えていました。その様子を見て、質問の内容や意味が分からなかったり、答えたいけれど何といえばいいか分からないのではないかと思った私は、ジェスチャー（それも難しい場合はカタコトの英語を交えました）も使って学生とコミュニケーションを取ることを試みました。すると、数名の学生が日本語か英語を使って当日の朝食の内容や起床時間を答えてくれました。私はこの経験をとおして、私には日本語を教える能力や技術が十分に身に付けられていないこと、まだ知識や経験が足りないことなどを実感でき、日本語教授法や日本語についてさらに学びたいと思うようになりました。また、それと同時に、ジェスチャーやカタコトの英語でも試行錯誤して伝えようとしたら相手に伝わることや諦めずに伝えようとすることの大切さを学ぶことができました。今年こそは「日本語教育特別演習」に参加し、本研修で学んだことや得たことを活かしたいです。

〈レスブリッジ大学（カナダ）交換留学生　日本語研修〉

交換留学生への日本語レッスン ボランティアを終えて

人文学部英米文化学科２年　**福士こはる**

私はレスブリッジ大学からの留学生に向けた日本語レッスンのボランティアに参加させていただきました。日本語教育の場を実際に体験するのは初めてだったため、多くの学びがありました。

日本語レッスンで留学生たちは、教科書を使ったりそれに関するゲームをしたりして、日常で使えるような日本語を学習していました。私たちボランティアは教科書の例文を読むことや、ロールプレイの手伝いなどをしました。ロールプレイも教科書に書いている文を読みましたが、実際着ている服や物に置き換えたりして楽しめるよう工夫しました。ほとんどの学生が日本語未習だったため、英語を混ぜながらコミュニケーションをしなければならず、それが私自身の英語学習の成功体験にも繋がり楽しかったです。

本イベントを通じて、日本語学習者がどのような部分でつまずいてしまうのかなどを知ることができました。また、改めて普段何気なく使っている日本語について学び、論理的に説明できるようにしなければならないと感じました。これからはこれらの気づきを活かして学習していきたいと考えています。

〈レスブリッジ大学（カナダ）交換留学生　日本語研修〉

レスブリッジ大学交換留学生への日本語レッスン

人文学部英米文化学科２年　**山形　蒼太**

今回のこの活動が、実際に日本語を母語話者としない方に対して、日本語を教えるという活動をしたけれど、やはり難しいことがたくさんあって言語の壁を感じてしまうこともあった。

日本語を理解することができるレベルや日本語学習への関心度も人によって違う相手にまとめて複数人で教えるということは、容易なことではないということを再認識することができた。

しかし、日本についてのエピソードや内容に関連することを自ら質問してくれた際には、力になってあげたいという思いが芽生えた。また、英語を使って日本語を教えて理解してもらえた時には、やりがいを感じることもできた。

今回の活動を通して、日本語を教えるという行為に対して明確なイメージを持つことができた。自分自身が他言語を学んでいる際に楽しいと感じることなどを、教える側の立場になって還元することができることは、貴重な経験にもなるし自分自身への学びにもつながった。今後も言語学習を頑張ろうとも思うことができたきっかけにもなったので、機会があればまた積極的に取り組みたいと思う。

北 海 学 園 大 学
日本語教員養成課程報告書　第 9 号

編　集　北海学園大学日本語教員養成課程委員会　（委員長　丸島 歩）
発行日　2024 年 3 月 31 日
発　行　北海学園大学日本語教員養成課程委員会
〒 062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号
TEL（011）841-1161（内線）2295（丸島研究室）／ FAX（011）824-7729

